

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380510

研究課題名(和文) ダイナミック・ケイパビリティ形成プロセスの理論的・実証的研究

研究課題名(英文) Theoretical and empirical research on dynamic capabilities

研究代表者

朱 穎 (SHU, EI)

九州大学・経済学研究院・准教授

研究者番号：50334610

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は近年欧米で進められている経営学、及び認知科学論のアプローチに基づき、「ダイナミック・ケイパビリティ」の形成プロセスを理論的実証的に検証するものである。これまでの既存研究の多くはいずれもダイナミック・ケイパビリティの重要性及び概念の精緻化を図る方向で展開されてきたため、実際にそれがどのように構築されているのか、というプロセスについての実証が不十分である。本研究は欧米の最新研究成果に基づき、特にダイナミック・ケイパビリティの構成概念の細分化を行い、その背景にある行動的認知的プロセスの解明を行った。

研究成果の概要(英文)：Based on the concept of behavioral microfoundation of the firm, this study examines the underlying process of capability development by decomposing the concept of capabilities into different categories. Among the three different types of capability development, we found that capability replacement will be confronted by high cognitive barriers when the resource base that the acquired resources replace is central to a firm's technology and identity. The empirical findings contribute to the previous research by highlighting how cognitive aspects are related to the formation of capabilities in different levels, therefore enhancing our understanding on how firms or managers need to direct their attention on resource reconfiguration in the face of technological change.

研究分野：経営学

キーワード：ダイナミック・ケイパビリティ 認知的バイアス

1. 研究開始当初の背景

急激に変化する外部環境に対処するために組織内外の資源を「統合、構築、そして再構成する能力」、いわゆるダイナミック・ケイパビリティ（動態的能力）が注目されている。これまでの既存研究では、ケイパビリティの機能的側面を強調した議論（Teece et al.,1997）から、組織プロセスに注目した議論（Eisenhardt and Martin, 2000）まで、経営戦略論の分野において様々な研究が展開されてきた。しかしながら、既存研究の多くはいずれもダイナミック・ケイパビリティの重要性及び概念の精緻化を図る方向で展開されてきたため、実際にそれがどのように構築されているのか、というプロセスについての実証が不十分である。結局、「ダイナミックな能力があるから、だから環境変化には対応できる」という一種のトートロジーに陥ってしまう恐れが指摘されている（Priem and Butler, 2001）。欧米で進められてきた最先端の経営学研究では、経営資源及びケイパビリティの静態的属性そのものではなく、環境変化に対する認知的枠組み、意思決定におけるトップ・マネジメントの注意力（Attention）といった要素が強調されている（Ocasio,1997; 2011）。こうした既存議論をベースに、本研究の目的はイノベーションの異なる局面に対して、企業がどのようにダイナミック的に組織能力を変化させていくのか、ケイパビリティの構築プロセスについて、認知的バイアスのコンテキストにおいて掘り下げて体系的に分析していくことにあった。

2. 研究の目的

欧米ですすめられてきた最新の経営学研究では、ケイパビリティの持つ組織論的、心理学的、更に認知科学の分野からのアプローチが増えており、環境変化に対する認

知的枠組み、組織内メカニズムといった要素が強調されている（Ocasio,1997; Lewin et al., 2011）。しかし、これらの論点についての理論的精緻化と実証研究の蓄積が遅れており、ここに本研究の目的があった。

3. 研究方法

主に文献サーベイと実証研究の二つから構成されている。まず、文献サーベイを行い、「ダイナミック・ケイパビリティ」という、古くから議論されてきたテーマについて、既存研究の現状と問題点を整理した。その上、組織内メカニズムとダイナミック・ケイパビリティ構築における相関関係を考える上で適用可能な分析フレームワークを構築した。さらに、文献サーベイと同時に、二次データの収集、並びに関連企業へのヒヤリング調査を実施し、ケイパビリティ構築における組織ルーティン、及び認知的バイアスの実態を調査した。

4. 研究成果

本プロジェクトは助成期間において、下記の主な研究成果を得ることができた。まず、Duke 大学Arie Lewin 教授との共同研究では、組織と外部環境の相互依存関係について、従来の「資源依存論(Resource Dependence Theory)」を拡張する研究成果をまとめた。資源依存論は欧米の経営学でもっとも影響力のある理論として組織論及び戦略論研究の基礎となっている。従来の考え方では、経営資源の豊富な組織は外部環境をコントロールするには優位であるという命題に対して、私達の研究では、資源をもたない弱小組織に焦点を当て、こうした組織はいかにダイナミック的に外部環境を構成していくのか、いわゆる弱小企業の環境コントロール戦略を分析した。この研究成果は、従来の資源依存論を拡張する方向としてその有効性が認められ、

本助成期間において、有力な国際学会において2回発表し、*Organization Studies (Impact Factor:2.79)*という組織研究で高い評価を得ている国際学術ジャーナルに採択された。なお、この研究成果は資源依存論への貢献のみならず、制度論に基づく戦略論研究への拡張も期待できる。第2の研究成果として、経営資源の制約を抱えているアントレプレナーシップ型企業に焦点を当て、こうした企業におけるダイナミック・ケイパビリティの生成プロセスについて「創発戦略」の概念から再考を行った。「創発戦略」というコンセプトは経営戦略論の重要な一派としてもともと大企業の戦略生成プロセスを分析するために提唱された。こうした大企業を前提に展開されてきた「創発戦略」に対して、本助成の第2の研究成果として、創業初期のアントレプレナー型業における創発戦略を分析した。アントレプレナー研究の中で最も重要とされている「起業プラン」の有効性、いわゆる優れた起業プランが事業成功を導くというリニア型の考え方に対する反論として、事前に必ずしも明確な戦略がなく、むしろ外部環境とのダイナミックな学習プロセスの中で、事後的に戦略を進化させていくという、創発能力の重要性を提唱した。なお、この研究成果は本助成期間において、国際学会で発表し、国際学術ジャーナルに採択されている。第三の研究成果として、「動態的能力」という概念の深耕化と再構築を目指して、能力の組み合わせ、代替、進化という三つのサブ概念まで掘り下げ、それぞれにおいて、認知的バイアスがどのように影響するのか、あるいは影響しないのかに関する実証研究を行った。三つの異なったレベルにおいて、企業は代替能力に取り掛かる際に、より多くの認知的バイアスに直面するという分析結果が明らかになった。この研究成果はアメリカ経営学会 (Academy of Management) の

2015 年年次大会、及びDRUID Conference (ヨーロッパ・イノベーション学会) といった定評の高い国際学会において、査読付きペーパー発表を2回行った。この研究成果はダイナミック・ケイパビリティの概念化を従来の抽象的なレベルからよりサブ次元に落とすことにより、近年欧米の経営学で主流になりつつあるBehavioral Strategy(行為論的戦略)との関連性も高いことから、有望な研究方向として今後も継続していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- 1) Ei Shu & Arie Y Lewin. 2017. A Resource Dependence Perspective on Low Power Actors Shaping their External Environment: The Case of Honda. *Organization Studies*, Forthcoming.
<http://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/0170840616670432>
- 2) Ei Shu. 2017. Emergent Strategy in an Entrepreneurial Firm: The Case of Lenovo in its Formative Years. *International Journal of Emerging Markets*. Vol 12 (3)
<http://www.emeraldinsight.com/doi/abs/10.1108/IJoEM-01-2016-0016>

[学会発表](計7件)

- 1) Ei Shu. 2016. Influence or Being Influenced: Social Movements and Strategic Action. Academy of Management 2016 Annual Meeting, Anaheim, CA. USA. 査読有
- 2) Ei Shu. 2016. Influence or Being Influenced: Social Movements and Strategic Action. Strategic Management Society 63th Annual Meeting, Berlin, Germany. 査読有
- 3) Ei Shu. 2015. Cognitive Micro-Foundations of Developing Capabilities, *Academy of Management 2015 Annual Meeting*, Vancouver,

Canada. 査読有

- 4) Ei Shu. 2015. Cognition and Capability Development in Different Modes. Druid Asia Inaugural Conference. Singapore. 査読有
- 5) Ei Shu & Arie Lewin. 2014. Low Power Actor Reshaping External Regulatory Environment. Academy of Management 2014 Annual Meeting. Philadelphia, PA. USA. 査読有
- 6) Arie Y Lewin & Ei Shu. 2014. Exploiting Formal Institutional Opportunity Spaces: Unexplored Sources of Firm Survival and Growth. Academy of Management 2014 Annual Meeting. Philadelphia, PA. USA.
- 7) Ei Shu. 2014, Strategic Adaptation and Management Innovation in a Constrained Environment. Inaugural Management and Organization Review Frontiers Conference, Hong Kong.

〔図書〕(計 1 件)

- 1) 朱穎「グリーン・イノベーションへのアプローチ：環境規制からグリーン・アントレプレナーシップまで」植田和弘・島本実編著『グリーン・イノベーション』所収。中央経済社近刊。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
朱穎 (SHU EI)
九州大学・大学院経済学研究院・准教授
研究者番号：50334610

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

(4) 研究協力者
()